

NO. 22
March '97

Newsletters

神戸女学院大学
女性学
インスティテュート

哲学と女性について

大野 篤一郎

「哲学と女性について何か書け」という宿題を女性学インスティテュートから頂いたので、まず、これを「哲学の中では女性はどうに考えられてきたか」という問題に書き直してみました。しかし、困ったことに、哲学の古典の中で正面から女性について論じている本は殆どありません。19世紀から20世紀初頭にかけてよく読まれたドイツの哲学者、ショーペンハウアーが『哲学小品集』の中で「女について」という論文を書いていたのを思い出して、改めて読んで見ました。すると「女の姿を見ただけでも、女が精神的にも肉体的にも、大きな仕事には向いていないことが分かる」とか、「女は一生、子供のままだ」というような「これは性差別の見本だ」と言える文章が次々に出てきます。どうもこれでは「哲学はこれまで女性を無視するか、敵視してきた」というフェミニストの主張は正しいと認めざるをえなくなりそうです。

それではフェミニストたちは哲学に愛想を尽かして見限ったのでしょうか。そうとは言えないようです。そこで、次に、「女性、特にフェミニストたちは、哲学をどう考えているか」という問題を取り上げることになります。フェミニストたちの多くは、伝統的哲学の持つ「家父長的傾向」を真っ向から批判しました。そして彼女たちは、これまで無視されてきた女性の視点を哲学の中に取り入れることによって、新しい研究領域を開拓しているように見えます。

ポッドイントンというプリストル大学の女性の哲学者は、「女の哲学の問題点」という論文で、哲学が非常に難しい学科であるというある男の哲学者に反論して、哲学が必ずしも難解極まりない体系である必要はないと主張しています。この意見には賛成です。また、女性は哲学に向いていないというのは、男性的偏見に過ぎず、フェミニスト運動が盛んになる以前にも、優れた女性哲学者が存在したことは誰でも認めなければならないと思います。ポッドイントンは、女性にとって得意な領域の一つは、倫理学であると主張していますが、これは既に1983年に公刊されたキャロル・ギリガン の名著『異なる声で』によって証明されています。彼女は発達心理学的研究に基づいて、道徳的判断において、男性は義務を重視し、女性は責任を重視すると

主張しました。

しかし、女性でないものには、女性の経験は理解できないというフェミニストの論文に時々登場する主張は、哲学は男性にしか分からないという主張と同様、一種の独断であって説得力を欠いていると思われま。それは痛みは痛みを感じている本人にしか理解できないというのと似ています。しかし、実際は医者も他人の痛みも理解できるように、女性の経験も女性でないものにも理解可能でなければならないと思われま。フェミニストが「女の経験」と称するものが具体的にどのようなものを意味しているのかが余り明らかでないことも問題だと思います。もし、それが妊娠とか育児とかいうことであるとすると、妊娠したこともなく子供を育てたこともない女性は、女ではないのかという反論が出てきそうです。そもそも、全ての知識は、経験に基づくという経験論的認識論では、この問題は片づかないのではないかという気もします。いずれにしてもフェミニストの哲学が抱えている問題には哲学的に興味のある問題が多いように思われま。若い女性がこういう問題について、大いに思索して下さることを期待したいと思います。

(文学部長、総合文化学科教授)

タイの人々にふれて

—ボランティア体験ツアーに参加して

川口 美礼

私は昨年8/17～8/24の一週間、女性学インスティテュートから大阪YMCAの主催する「タイ・ボランティア体験ツアー」に参加させていただいた。2年前に決定した、AWI(The Asian Women's Institute)の企画によるインド・パキスタンへの派遣がこのような形となってしまったのは残念だったが、しかしタイでもすばらしい出会いが私を待っていた。

首都バンコクでは、急速な都市化が進んでいる。街には日本やアメリカ企業の看板があふれ、渋滞が問題となっている車は見たところほとんどがイズズと日産であった。街のあちこちで大規模な建設工事が行なわれている。そしてその一方で、スラムに住む人が人口の約20%という都市化のひずみを抱えている。私たちはバンコクに1,200以上あるといわれているスラムの

うち二つのスラムを訪れた。

Wat Sudhi Slum では700~800人が生活している。ここの大人たちのほとんどが、近くの海老の冷凍工場で一日89バーツ（約350円）で日雇いとして働いている（大卒初任給月額約5,600バーツ）。親が工場で働いている間、小学校へ上がるまえの3才~6才の子供たち60~70人がスラムの集会所で過ごす。そこでは一日10バーツ（約40円）で勉強を見てもらい、昼食とおやつがもらえる。私たちはその集会所での活動に一日参加させてもらった。その日は日曜日だったこともあって、小学生や中学生の子供たちとも一緒に作業（その日は集会所のペンキの塗りかえの日だった）をすることができた。



Wat Sudhi Slum の子どもたちと

そのスラムには里親制度があり、日本でも何人かの人たちが子供たちの学費を援助しているそうだが、進学できて高校までだそうである。中学生の女の子たちに「今、何が一番楽しい？」と聞くと「勉強が楽しい」という即答が返ってきた。

バンコク最大のスラムである Slum Klong Toey にある Pre-School では、都市化のひずみを無くするという理念のもとに、都心部の新中産階級と呼ばれる人たち（中華系の人が多い）の子供たちが通う Pre-School とまったく同じカリキュラムを行なっている。そこでは教育の平等化が差別の再生産を防ぐと考えられているが、現在ではスラムのなかでの貧富の差の拡大が進み、そこでの学費一日10バーツが払えないためにたまにしか Pre-School に来ることができない子供もいるそうである。

タイの抱える大きな問題のもう一つに、エイズの問題がある。最も深刻な地域の一つであるチェンマイでは、貧しい山岳民族の女性たちがバンコクで売春婦として働き、HIV に感染して帰ってくるという経路が多い。そこで、タイ語の分からない山岳民族の人々に、エイズの恐ろしさを知ってもらおうという活動が5年前から行なわれており、そのスタッフに話を聞くことができた。

Health Project for Tribal People では、それぞれ異なった言語・文化を持つ民族ごとに教材を作り、エイズという病気がどういふものか、そしてそれを予防するにはどうすれば良いかなどを村々を廻って広めている。しかしアカ族・ラフ族とよばれる人たちは家が貧しいと簡単に娘を売ってしまう傾向があり、娘たちは売春で稼いだお金を村に送っている。そしてやがて村に帰ってくるのだが、自分が HIV に感染していることに気づかないまま結婚して子供を生み、何年もたってから、家族全員が感染してしまっていたことに気づくというケースもある。今タイでは、5,000人以上のエイズ・ベビーが誕生しているという報告がある。

スラムの問題も、エイズの問題も、貧困という問題が根底にある。一日10バーツが払えないために学校にいけない子供たちがいる一方で、パソコンが完備され、外車で送り迎えという学校に通う子供たちもいる。その子たちは高校で英語・フランス語・ドイツ語の3ヶ国語を習い、「今何が一番楽しい？」と聞くと日本のアニメやアイドルの名前があがった。

このような貧富の差の拡大はタイ一国の問題ではない。このような拡大を生み出した原因の一つとしての急速な経済発展の一環は日本企業が担っているし、スラムの大人たちが働いている工場の製品の多くは日本に輸出されている。それはエビ、プロイラー、イカ、ペットフードなどにまで及んでいる。そして、貧困のために売られる娘を買っている日本人男性もいる。

今回、私たちを受け入れてくださったスラムの人々、学校の先生、山岳民族の子供たち、そして突然の宿泊を精一杯歓迎してくださった農家の人々、ありきたりかも知れないが、本当にくったくのない笑顔で私たちを迎えてくださった。マイ・ベン・ライ（気にしない）の精神は私たちにゆとりというものを教えてくれた。これらの出会いを大切にしながら、日本にいる自分という存在を考えていきたい。

（大学院文学研究科修士課程：社会学専攻）



Mong 族(山岳民族)の小学校で

『女と男』—ある学生の疑問に答えて

溝口 薫

思春期ともなれば、程度の差こそあれ誰しも性差の重荷を感じざるを得ない。それは多くの場合、文化的社会的に規定された〈女らしさ〉や〈男らしさ〉の概念が、本来は自由なはずの〈個人〉の在り様を束縛する時に強く感じられてくる。が、重荷と感じるその感覚の原点には、性を自分の意志で選べないという厳しい現実がある。自分の理性や努力に関わりなく変化してゆく肉体に一方的に示されてくる生物学的性。これをただ引き受けなくてはならないことには、確かに被造物としての敗北感がつきまとう。

女／男—この性の厳しい区別は、しかしながら、専門家によれば、子孫の多様性には不可欠の条件なのだそうだ。男女の区別があると遺伝子の分配や交換が行なわれ、一つ一つの個体が微妙に異なるように作られるため、自分と同体の子孫しか産まない単性生殖に比べて、著しい多様性が得られるというの

だ。言い換えれば、一つ一つの生命が唯一無二の存在になるための基盤が、つまりは、私共各自が皆少しづつは誇りを持ち、大切だと思っているいわゆる個性の基盤が、女男の区別によって与えられているということだ。

今日私達はこうした生物学的知見に加え、文化の中で規定されている〈女性〉〈男性〉の区別が、決して固定されたものでないこと、のみならず、それぞれの文化による規定が個人に内在化され、そうして形成される自らの内なる〈女性〉／〈男性〉が、これまた一枚岩ではないことを承知している。とすれば、私達人間は、女男の区別のある生物として、共々豊かな個を日々新たに創出するように造られているばかりではなく、社会的存在として、そして言語と切り離せない存在として、内面的にもそうあるように造られているということになる。

女も男も決して同じではない。が、互いに対立する極端ではなく、また一方を抑制せねば他方が成立し得ない関係ではなく、それぞれが個〈個〉として豊かに生きるためにデザインされた異体同種^{なまごうし}なのである。
(英文学科助教授)

1996年度年間活動報告

I 講演会・報告会等(*は連続企画)

講演会 1996年5月1日(水)

*「アジアの女性」(No.1)

「中国女性千年のいたみ

—纏足を解かれるまで、そして現在」

講師：笥久美子氏(神戸大学名誉教授・奈良大学教授：中国文学専攻)

[出席者：97名]

講演会 1996年6月7日(金)

*「アジアの女性」(No.2)

「軍事政権下のビルマの女たち—アウン・サン・スー・チーさんに希望をたくして」

講師：南田みどり氏

(大阪外国語大学教授：ビルマ文学専攻)

[出席者：103名]

特別講義 1996年6月26日(水)

“Current Feminism(s) in America”(英語)

講師：マデリン・ムーア氏

(米・カリフォルニア大学サンタクルーズ校教授：英文学専攻)

[出席者：125名]

座談会 1996年7月2日(火)

*「アジアの女性」(No.3)

「インドの女性問題」

講師：牧野由紀子氏

(インド・アラハバード農科大学農民研修センター婦人研修主事)

[出席者：30名]

ビデオ上映会 ①1996年9月27日(金) /

②10月17日(木) / ③10月21日(月)

「戦士の刻印—女性性器切除の真実」(製作：英)

[出席者：計57名]

講演会 1996年10月24日(木)

*「アジアの女性」(No.4)

「韓国女性の役割と貢献

—東アジアの女性との比較」(英語)

講師：高全恵星氏(米・イェール大学東アジア

研究所所長、国立民族学博物館客員教授：比較社会学専攻

[出席者：21名]

報告会 1996年11月11日（月）

*「アジアの女性」(No. 5)

「山岳民族の女性とエイズの問題

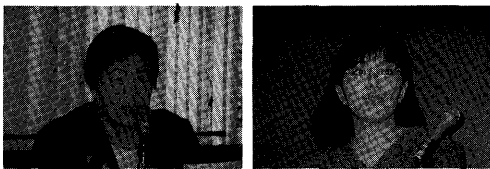
ータイ・ボランティア体験ツアーに参加して」

報告者：川口美礼さん

(神戸女学院大学大学院文学研究科修士

課程：社会学専攻)

[出席者：16名]



高全恵星氏

川口美礼さん

特別集会 1996年11月22日（金）

「国際関係の現場から

ー高まる女性研究者への期待」

講師：福島安紀子氏(総合研究開発機構主任研究員、大E91)

[出席者：30名]

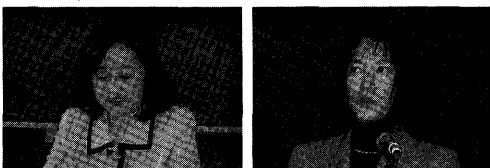
講演会 1996年12月5日（木）

*「アジアの女性」(No. 6)

「諺と映画に見るタイの女性」

講師：宮本マラシー氏(大阪外国語大学助教授
：タイ語・タイ文学専攻)

[出席者：45名]



福島安紀子氏

宮本マラシー氏

ビデオ上映会 1996年12月19日（木）

「クラスメイト」(製作：タイ)

[出席者：15名]

報告会/茶話会 1997年1月14日（火）

*「アジアの女性」(No. 7)

「Bangladeshの女性についてーBangladesh
シュ・スタディーツアーに参加して」

報告者：南出和余さん

(神戸女学院大学英文学科3回生)

柴田千晶さん(総合文化学科2回生)

山田綾子さん(人間科学科2回生)

岡井朋子さん(英文学科2回生)

[出席者：32名]



報告会

II 研究助成

「記号としての身体・記号としての性」

内田 樹[総合文化学科・教授]

「〈家庭小説〉を中心として明治30年代小説と読者層についての研究」

飯田祐子[総合文化学科・専任講師]

III 学会等出張補助

東京大学社会科学研究所・お茶の水女子大学
ジェンダー研究センター共催国際シンポジウム

「アジアにおける開発と女性労働」(お茶の水
女子大学・東京都：1996年12月17日)に出席。

風呂本惇子[英文学科・教授]

松澤員子[人間科学科・教授]

IV 女性学講座

1996年度より科目名「現代女性論」として開講
された。(但し、1996年度は前期のみの開講)

V 出版物

『女性学評論』第11号 特集：歴史のなかの女性
(1997年3月発行)

「ニュースレター」No.21 (1996年9月発行)

「ニュースレター」No.22 (1997年3月発行)

VI AWI (The Asian Women's Institute: アジア女性 研究所) との交流

1996年度は特記事項なし。

VII その他

学生の活動に対する補助：「やぎの会」(環境問
題を考える会)の諸活動に対し支援を行った。

※ 図書の閲覧・貸出希望者は、デフォレスト
記念館3階303号室(D-303)まで

1996年度女性学インスティテュート編集委員

別府恵子、風呂本惇子(委員長)、正木芳子、孟真理、
清水忠重(ABC順) 編集事務：豊福裕子

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティテュート

〒662 西宮市岡田山4-1 ☎(0798)51-8545